古い校舎よさようなら
なごりをおしむ在校生と同窓生のつどい

旧校舎をなつかしむ会が七月十八日大総小学校体育館で行われました。

この会は、防音校舎が近く落成することに伴って、旧校舎が取壊されるため、大総地区区長会、大総小P・T・Aが計画したものです。

当日は、八時三〇分から同校児童の発表会が行われ「みなと」、「とんび」などの昔なつかしい小学唱歌が披露され、最後に「六十年もの長い間、ただ黙って私達を見守ってきてくれたこの古ぼけた校舎よありがとう」という六年生土屋留理さんの作文朗読等があり第一部が終りました。

このあと第二部では、旧大総村時代の村長であった吉岡豊氏、土屋熹一氏の両名が昔を偲んで色々な思い出を語ってくれました。多くの思い出を私達に残してくれたこの校舎は八月には取壊され、児童達は新しい防音校舎にうつってゆくわけです。

この日参集した同窓生たちは、建設が進む新校舎と昔自分達が学んだこの古ぼけた校舎を見くらべ複雑な気持でいたことでしょう。

ありがとう旧校舎

六年　土屋留理

「ありがとう。」

私は、今、学習しているこの古い校舎に、心からお礼を言おう。

雨にたたかれ、風にうたれて、約六十年もの長い間、だまって、ただだまって私たちを見守ってきてくれたこの古ぼけた校舎。

美しかったペンキの色も消えて木目や節だけがきたなく、灰色に目立っている。

教室の天じょうは、いたずらに投げつけられたぞうきんのあとやボールのあとがしみついて、こげ茶色の暗い教室が、もっと暗く感じる。入口の戸も、ガラス戸も、「ギシ、ギシ」と音を立てて、うまくすべらない。

でも、この古い校舎は、六十年もの長い間、ただだまって私たちを見守ってきてくれた。

私たちの祖父母の時代、父や母の時代、そして私たちへと受けつがれた校舎。

あの柱のキズはだれがつけたのだろう。あのカベのボールのあとはだれがつけたのだろう。校舎はみんな知っている。

私たちが心におちつきのない時などは、「何をうかれている、そんなにうかれていると、学習がおくれるぞ」と、心のブレーキをかけてくれる。

この古い校舎にも、親友が一人いる。大総小のシンボル「くすの木」だ。

この校舎が生れたころ、このくすの木も校庭に植えられたのだろう。

この学校の卒業生はおよそ二万人だそうだが、みんなこの校舎とくすの木の親友に育てられたわけだ。

春になると卒業生を送り出し桜が咲くころは、かわいい一年生を迎える。

そして、今は、私たちの目標になるまでに育った。その間中、くすの木と校舎は仲よく語り合っていただろう。

こんど、旧校舎がこわされることを、一番悲しんでいるのは、校庭のくすの木かも知れない。

だって、親友がいなくなってしまうもの。「さびしいな」

けれど、しかたのないことなんだ。年をとって、人間ならつえをつかなければ、立てないくらいガタガタになってしまっているのだ。

でも、人間は年をとって、おじいさん、おばあさんになってくると、そのしわの一つ一つに、いままでどのように生きてきたか、その顔にでてくると思う。

たとえば、その人の顔を見ていると、いろいろな苦労をしていたり、りっぱなことをやりとげた人の顔は、おちつきに満ちていて、何でも話せる感じだ。それに人の心をひきつける。

もちろん、この校舎もおちつきに満ちていて、いつも私たちをやさしく見守ってきてくれた。

うれしい時、かなしい時、この古い校舎の思い出は、一生忘れられないだろう。

私たちは、らい年白く美しい新校舎から卒業する第一期生だけどこの古い校舎は忘れられない。

「ありがとう旧校舎」

「さようなら旧校舎」

建設のあゆみ

7月～8月

着工及び工事中の事業

①建築工事

横芝町共同利用施設新築工事　1,719.55m²

②道路舗装工事

中台線	260m
老人ホーム入口	172m
栗山公営住宅内	
北清水関場区内	451.5m
	702.0m

③排水整備工事

栗山伸和会地先	214.5m

完成した事業

①道路舗装工事

両国新田―古川線	286m
栗山第一区内線	934.5m
栗山第三区内線	661m
屋形荒場線	337m
立合線	221m

横芝俳壇

横芝句会七月例会　土屋　栗水

街を出て曲る葬列夏の草　石川　奇水

一金五両の碑史や閑古鳥　斉藤ちくろ

夏草に負けて疲れし鎌の腕　若梅あやめ

争いて番待つ孫や七夕馬の出来　藤代　ゆう

鉄線を活けし小部屋に読みふける　古谷　紅雲

刈り草のなお生きつづき梅雨ながし　三枝　句城

蓑の顔しげしげ見たり梅雨の庭　林　義村

夏草にうもれて笑める地蔵尊　池田　和代

売れぬ荷の背中に重し日の盛る　安井ゆずる

夏草や十勝野尽くる所なし　伊藤　保人

日盛りの槇塀に寄りバスを待つ　佐久間実枝子

夏草や帰化植物の花まじり　佐久間久子

夏草の中に蓑いて鎌そらす　木下　秀子

梅雨寒し衣のかたずけままならず　奥山　崩古

墓碑名も寂びて夏草丈高き　戸部　澄江

夏草の中にあやめは黄なりけり　大石　秋羅

夏草や種蒔きしかと思うほど　加藤　庄長

日盛りを日影にあえぐ放ち鶏　原　ひさし

日盛りや木蔭に眠くせ乳母車　木下石果子

水を撒く草花店や日の盛り

次回八月十一日午後一時半

兼題　終戦の日、日まわり